

2025年度

文芸表現学科

カリキュラム外部評価結果報告書

2026年3月

京都芸術大学 芸術学部 文芸表現学科

カリキュラム評価委員会

## 目次

カリキュラム評価委員会委員名簿	p.1
総評	p.2
評価結果	
基準1. 理念・目的	
1-1 学科の「人材の養成に関する目的」の設定と周知	p.4
基準2. 学生	
2-1 学生の受け入れ	p.5
2-2 学修支援	p.5
2-3 キャリア支援	p.6
2-4 学修環境の整備	p.7
基準3. 教育課程	
3-1 単位認定	p.8
3-2 教育課程	p.8
3-3 教員・職員	p.10
基準4. 学修成果	
4-1 在学中～卒業時	p.11
4-2 卒業後	p.11
基準5. 内部質保証	
5-1 内部質保証の機能性	p.13

2025年度

京都芸術大学 芸術学部 文芸表現学科

カリキュラム評価委員会 委員名簿

委員長：深井聡一郎

(東北芸術工科大学 工芸デザイン学科教授／芸術工学研究科長)

委員：石川忠司

(東北芸術工科大学 文芸学科教授)

上月翔太

(愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室講師)

大島有美子

(株式会社新潮社 文庫出版部 新潮文庫編集部)

## 総評

本評価は、京都芸術大学芸術学部文芸表現学科の教育活動および運営状況について、理念・目的、学生支援、教育課程、学修成果、内部質保証の各観点から提出資料およびヒアリングに基づき総合的に検証したものである。その結果、同学科の教育は、大学の建学理念「芸術立国」および「芸術と哲学によって新しい人間観・世界観の創造を目指す」という使命を具体化するものとして、概ね適切かつ体系的に運営されていると評価できる。また学科の「ことば」に関する実践的・理論的学びを通じて、「新しい言語表現を追求する創造力」と「文芸と社会をつなぐ人間力」を養成する目的を明確に設定している。この目的は、大学の教育目標である「人間力」と「創造力」の育成を具体化し、小説家やライターの伝統的職業像を超えて、編集能力を広義に解釈した協働解決力を重視する点で、現代のコンテンツ需要や社会課題に即した独自の特色を有する。変化する社会環境への柔軟な対応を示しており、大学公式サイトやパンフレットを通じた周知も適切である。

教育課程は、学科が掲げる「ことばの力で社会を編み直す人材の育成」という目的は明確であり、ディプロマ・ポリシーを踏まえた学科ループリック、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーの整備を通して、教育課程全体に一貫して反映されている。「読む・書く・編む・聞く・話す」という言語活動を段階的に統合するカリキュラム設計は、創作技術の習得にとどまらず、批評性や協働性を備えた人間力の涵養へと接続するものであり、芸術大学における文芸教育として従来の文学教育を更新しようとする姿勢は、社会の変化に応答した先進的な試みである。創作ワークショップや合評、リライトを組み込んだ反復的学修の仕組みは、学生が批評的視点を獲得しながら表現を深化させるための有効な方法である。また、文芸誌制作やイベント運営などの社会実装型科目は、表現を社会へ接続する実践的教育として特筆に値する。少人数教育の利点を活かした丁寧な添削指導や対話的授業運営も、学修の質を高める要因となっている。

学生支援およびキャリア支援についても、教職協働体制のもとで体系的に整備されている。DPA面談や出欠データの共有、月例の学科会議による情報共有など、教職協働によるきめ細やかな支援体制は、少人数教育の強みを活かした実効性の高い取り組みである。キャリア教育についても、1年次から段階的に位置づけられ、インターンシップを含む実践的機会が制度的に確保されている。2024年度の進路決定率100%や、編集職等への安定的な就業実績は、教育成果が社会的成果へと結実していることを示している。さらに、卒業制作作品の刊行や文学賞候補者の輩出は、学修成果が社会的評価へと接続している明確な証左である。

内部質保証の観点でも、学科会議や学科内でのFD研修、授業改善アンケートに基づく組織的改善活動が継続的に実施され、PDCAサイクルが機能している。専任・非常勤を含めた教員間の理念共有と相互点検の仕組みは、教育の一貫性と質の維持向上に大きく寄与している。

一方で、志願者数の動向や卒業時満足度の年度間変動については、より精緻な要因分析と戦略的対応が求められる。また、生成AIの普及や出版業界の構造変化を踏まえ、著作権やライツビジネス等に関する基礎的知識の体系的導入、新たな表現環境における文芸教育の意義の再検討も今後の課題であ

ろう。学修環境は「百讀ライブラリー」ラウンジが自律的学びを促進するが、占有スペースの確保は今後の検討課題であろう。

総じて、文芸表現学科は理念の明確性、教育課程の体系性、教職協働の機能性、社会との接続という諸点において十分な水準に達しており、内部質保証も適切に機能している。今後も社会的要請の変化を的確に捉えつつ、「ことば」を軸とした創造的教育のさらなる深化を期待したい。

2026年3月

委員長 東北芸術工科大学教授 深井聡一郎

## 基準1.理念・目的

### 基準項目1-1 学科の「人材の養成に関する目的」の設定と周知

- 1 大学の理念・教育目標との関連性
- 2 個性・特色の明示、変化への対応

#### 【評価】

基準項目1-1を満たしている。

#### 〈理由〉

文芸表現学科の「人材の養成に関する目的」は、「ことば」に関する実践的かつ理論的な学びをつうじて、人間と社会を常に俯瞰的かつ批評的に見つめ、新しい言語表現を迫及する創造力と、異なる価値観をもった他者とのたゆまぬコミュニケーションと協働によって、文芸と社会をつないでいく人間力を身につけます。これら二つの力をもとに、ことばの力で社会を編み直し、社会に新しい価値を生み出すことのできる人材を育成します。」と定められており、大学が掲げる建学の理念「藝術立国」および「芸術と哲学によって、新しい人間観・世界観の創造を目指す」という基本使命、さらには「人間力」と「創造力」の育成を掲げる教育目標に基づき、適切に設定されているといえる。

学科は、これら大学全体の教育目標をさらに具体化し、「新しい言語表現を追求する想像力」と「文芸と社会をつないでいく人間力」として定義している。小説家やライターといった従来の職業像は変化しつつあるが、同学科が重視する「編集能力」を広義にとらえ、地域や企業、個人の課題を読み解き、他者と協働して解決に導く力として育成している点は、現代社会のニーズに即した独自の方向性を示している。文芸を核にしながらも、変化する社会のなかで新しい価値を生み出そうとする目的は明快であり、大学の使命との整合性も高く評価できる。

学科の個性・特色は明確であり、大学公式ウェブサイトやパンフレットを通じた周知も適切に行われており、一般的な文学部とは違った、実践的教育の指針を広く社会に示している点は高く評価できる。特に「読む・書く・編む・聞く・話す」といった言語活動を総合的に捉え、芸術的側面と文学的側面を学際的に融合させていること、またコンテンツ需要の高まりを背景に、シナリオ（脚本）教育を教育の柱の一つとして明示している点は、社会の変化に即応した取り組みであると評価できる。

#### 〈参考意見〉

生成AIの普及が文芸表現に与える影響を注視し、新たな技術環境における表現の意義や、変化する人材需要について検討を行っていくことも必要かもしれない。

## 基準2.学生

### 基準項目2-1 学生の受け入れ

- 1 アドミッション・ポリシーに明示する資質・能力を備えた学生を確保できているか
- 2 学科魅力（特色）の訴求力

#### 【評価】

基準項目2-1を満たしている。

#### 〈理由〉

文芸表現学科では、大学のアドミッション・ポリシーに基づき、学生選抜を実施している。特に、体験授業型選抜は、受験生が入学前に学科の授業を体験し、自らの適性を確認できる仕組みとなっており、入学後のミスマッチを防止する教育的効果を有している。選抜においては、日本語能力およびコミュニケーション能力を測定するために、掌編小説の読書会や要約といった試験内容が採られており、学科の教育内容を反映した内容となっている。

入学後の学修状況については、1年次終了時点のGPAが学部平均をわずかに下回る傾向にあるものの、概ね標準的な水準を維持している。

一方、訴求力に関しては、入試倍率は一定の水準を満たしているものの、2023年度以降の減少傾向が学科の課題として認識されている。学科は、志願者に需要の高い「戯曲・脚本」を教育内容に加えるなど、新たな志願者層の開拓に注力している。結果として、第一志望の向上など、一定の成果が確認されている。

#### 〈参考意見〉

- 高大接続の取り組みを強化するなど、中高生に対して学科の魅力を知ることによって、志願者の安定的な確保を図れるのではないかと。また、文芸表現についての学習を通じて得られる汎用的能力や、多様なキャリア形成に繋がる可能性を具体的に提示していくことが望まれる。
- 選抜時にどのような能力が問われるのか、どのような準備が必要なのか、といった情報をより具体的に示すことは学生募集において重要であると言える。一般的な専門分野の入学選抜と比べて情報量が少ないことが、受験生にとってハードルとならないよう、可能な情報提供を検討してはどうか。
- 日本語で表現するという学科の特性に照らせば、留学生の受け入れに対するハードルは高いといえるが、中長期的な課題と検討してもよいだろう。

### 基準項目2-2 学修支援

- 1 主体的学修への転換
- 2 教職協働による組織的な学修支援の充実
- 3 専門的学修支援組織との連携
- 4 学生相互の学び合いの機会創出

#### 【評価】

基準項目2-2を満たしている。

〈理由〉

主体的学修への転換については、新入生ガイダンス等を通じてその趣旨を学生に周知している。大学共通の学修管理システム「DPA（DP達成度評価）」を活用した面談制度を運用しており、1年次においては複数回の面談を実施し、欠席者への個別対応を含めたきめ細かな支援を行っている。担当教員制度によるDPA面談は、授業進行の速いクォーター制の下、学生の主体的学修を支える有効な仕組みとして機能しているといえる。

教職協働による学修支援体制として、学習上のリスクの高い学生を発見するために出欠データを週単位で共有し、モニタリングする仕組みは、他の多くの大学にとって範となり得る取り組みであり、教職協働による学生支援の充実した体制がとられているといえる。また、障害学生支援については、学科教職員と学生支援センターとの間で連携がとられている。

学生相互の学び合いの機会創出としては、正課外において「歌会」「俳句会」「脚本読書会」等の活動が実施されており、こうした活動を通じて在学生・卒業生・教員が世代を超えて言葉を磨き合う関係性が構築されている。こうした学びの共同体が形成されていることは、学生の主体的学修の定着や離籍防止にも貢献する取り組みとして、非常に高く評価する。

### 基準項目2-3 キャリア支援

- 1 教職協働によるキャリア支援の充実
- 2 専門的キャリア支援組織との連携

【評価】

基準項目2-3を満たしている。

〈理由〉

学科のキャリア教育は、1年次から言葉の基礎を培い、2年次にクリエイティブ職への理解を深め、3年次にはインターンシップを通じて社会経験へ接続するべく、カリキュラムに体系的に組み込まれており、進級のための必修科目にもなっているなど、学生に対し、キャリア形成の機会を確保している。

また、京都という地理的特性を活かし、出版社やゲーム制作会社等の企業と連携することで、専門職に直結するキャリア支援を展開している点は特色といえる。安定的に進路決定率を維持できているわけではないが、キャリア支援の結果として、2024年度の進路決定率が100%となったことは大きな成果であろう。キャリアデザインセンターおよび教職協働による支援体制は有効に機能しており、内定者報告会や現役編集者による特別講義など、少人数教育の特性を活かした実務的な交流機会も継続的に提供されている点は評価できる。

インターンシップについては、参加率の向上が課題として認識されていたが、学科ではインターンシップを社会理解のための「フィールドワーク」と位置づけ、第1クォーターの必修科目内で参加を義務づけるなど、組織的な改善が進められている。

〈参考意見〉

- 昨今の働き方の変化を踏まえ、企業就職のみならず、起業やフリーランス、あるいは転職を重ねてのキャリア形成なども視野に入れたキャリア支援のあり方を検討しても良いだろう

う。創作活動と職業生活を両立させるキャリアモデルへの支援については、さらなる充実を図ることで、学科ならではのキャリア形成に資することが期待される。

#### **基準項目2-4 学修環境の整備**

- 1 学修環境の整備と適切な管理運営、有効活用
- 2 安全の確保
- 3 図書等の有効活用

##### **【評価】**

基準項目2-4を満たしている。

##### **〈理由〉**

学科の専用教室はないものの、1年次必修科目の指定図書である「百讀（ひゃくどく）ライブラリー」を配架した学生ラウンジが共有スペースとして整備され、学生の自律的な学びを支える場として機能している。一方で、特殊教室や設備を必要としない教育内容ではあるが、学生間の議論や交流を促進し、大学や学科への帰属意識や、学生の安心感を高めるための占有スペースの確保については、学科のみで解決できることではないが、今後の学科規模の推移に応じて検討すべき課題といえる。

安全面については、災害時の避難方法の周知など、学生の安全確保に向けた基本的事項は適切に実施されている。

##### **〈参考意見〉**

図書については、十分整備されているといえるが、今後デジタルコンテンツの増加が一層見込まれるなかで、電子的読書環境の充実を図ることも検討すると良いだろう。

## 基準3.教育課程

### 基準項目3-1 単位認定

#### 1 単位認定基準の周知と厳正な運用

##### 【評価】

基準項目3-1を満たしている。

##### 〈理由〉

単位認定基準は、各授業科目のシラバスに明記されており、成績評価は大学共通の基準に基づき実施されている。成績分布や、授業改善アンケートの結果からみても、単位認定は厳正かつ適切に運用されているといえる。成績評価基準については、ルーブリックを活用することで、評価の妥当性と授業難易度の適正化を両立させている。

##### 〈優れた点〉

成績評価基準やシラバスの統一を図るため、非常勤講師を含めた全体講師会や学科FD研修を定期的に開催し、専任教員が非常勤講師をサポートし、点検を行う体制を構築している点は、教育の質を保証するための優れた取り組みである。

### 基準項目3-2 教育課程

- 1 ディプロマ・ポリシーに基づく学科ルーブリックの策定と周知
- 2 カリキュラム・ポリシーに沿ったカリキュラムの体系的編成
- 3 初年次教育
- 4 教養教育
- 5 キャリア教育
- 6 社会実装教育
- 7 主体的学修への転換
- 8 授業形態（講義・演習・実習／対面・遠隔／クラス規模）別の教育方法の工夫・開発
- 9 教育内容・方法の改善・向上（FD）

##### 【評価】

基準項目3-2を満たしている。

##### 〈理由〉

文芸表現学科の「学科ルーブリック」は、学科教職員全員で協議した上で、大学のディプロマ・ポリシーを反映し策定されている。「学科ルーブリック」や、それに基づき設計された「カリキュラム・マップ」「カリキュラム・ツリー」は、在学生専用サイトを通じて学生に周知しているほか、講師会を通じて非常勤講師にも共有されている。「学科ルーブリック」は、

入学から卒業までの成長の過程がまとめられており、教職員の方向性を合わせるだけでなく、学生の学習の振り返りにも有用なものとして評価できる。

学科の教育課程編成は、「学科コア科目群」として、1年次から3年次を通して、「読む、書く、編む、聞く、話す」の5つの言語的側面からアプローチする授業科目が段階的に編成されており、大学のカリキュラム・ポリシーに即したコア・カリキュラと、順次性のあるカリキュラムとなっている。

初年次教育は、アセスメントテストの結果から入学者の資質・能力を踏まえた高大接続教育が実施されている。思考力や日本語運用能力が比較的高い入学者に対し、読むことを多角的に学ぶ「百讀（ひゃくどく）」や、創作のための企画や方法論を学ぶ「文芸メソッド」、創作の実践を行う「文芸創作ワークショップ」といった導入教育を行うほか、実践においては「小説」「戯曲・脚本」「詩」「編集・取材執筆」「短歌」のなかから、学生が関心に応じて複数選択できるカリキュラムとなっており、3年次までに学生が自身の専門ジャンルを決定することができるようにするための準備がなされている。

教養教育は、カリキュラム・ツリー上で学科推奨科目を学年ごとに提示し、学生に推奨している。1年次は芸術教養科目でもリテラシー向上を図る授業科目や、専門科目で涵養しづらい他者との協働を促す授業科目が推奨されている。2年次以降も、芸術や社会、ウェルビーイングに関する授業科目が推奨されており、芸術教養科目と専門科目を統合することで、「人間力」と「創造力」が形成される設計となっている。

学科のキャリア教育は、学科が掲げる人材養成目的を達成するため、「文芸専門職」「文芸専門応用職」「文芸専門総合職」という3つの進路パターンを掲げ、1年次から3年次まで段階的にキャリア授業科目が配置されている。さらに、社会実装教育を目指す「文芸と社会1～3」では、文芸雑誌の制作や文芸イベントの企画・運営、販促・販売管理などを通じて、表現は受け手があってこそ成立するということを体感的に学ぶことができる。また、大学の広報記事を学生が執筆し、『瓜生通信』という媒体で発表しているなど、実践的な学びの機会が多く提供されている。

主体的学修を促すため、授業内では、学生間のディスカッションや、課題のピアチェック、グループチェックが実施されている。また、作品の合評や講評についても、学生が相互にフィードバックする機会となっており、学生の主体的学修態度を引き出す工夫がなされている。

授業の運営においては、講義科目でも学生のアウトプットの機会を設けるなど、100分授業を冗長にさせない工夫がなされている。また、全体でのディスカッションを重視する授業科目は1クラスで運営し、丁寧な添削指導やフィードバックを重視する授業科目は少人数の3クラス、4クラスで開講するなど、授業の目的に照らした授業設計の工夫がなされており、クォーター制の特性を活かした教育デザインとして評価できる。

教育内容・方法を改善・向上するために、「学科FD研修」と「授業改善アンケート結果に基づく組織的改善活動」が定期的に行われている。「学科FD研修」では、「①新カリキュラム・マップに基づく各授業の位置づけや関連性の理解促進」「②「100分×2回×7週」の授業計画の効果的な運用」「③事前事後学習の拡充による密度の濃い主体的学習の促進と定着」

「④演習科目（文芸作品執筆）の授業時間半減による「書く分量と質」についての対策」といった4つのテーマについて各教員が相互に発表を行い資料を共有するなど、計画的かつ組織的なFDが実施されている。

〈優れた点〉

- 学生主体の文芸プロジェクトである「Storyville」は、学生の興味と社会での実践が結びついた優れた取り組みである。また、文芸誌『301』を一般書店で販売するため、販売委

託先の京都市内の複数書店を教員と学生で訪問し、書店員の意見を制作に活かすなど、実社会の意見を取り入れ、改善に活かしている点は非常に優れている。結果として、最新号が完売するなど、教育成果を社会に発表する機会としても有効に機能している。

- 学生の作品を、合評や講評を通じてフィードバックする機会を設けているだけでなく、その後学生がフィードバックを活かして作品をリライトし、再提出させる仕組みを導入している点は、学生の学習改善を促す優れた取り組みであると評価できる。

〈参考意見〉

- 文芸および関連領域への就業を志望する学生のキャリア形成を支援する観点から、著作権やライツビジネスに関する基礎的知識を習得する機会を、教育課程の中に順次取り入れていくことが期待される。近年の出版業界における収益構造の変化や、ライツ業務に対する社会的需要の高まりを踏まえ、法的な基礎知識や関連ビジネスの仕組みを学ぶことは、卒業後の実践的な活動において有益であると考えられる。
- クリエイティブ・ライティングは、一般的な大学においてもその意義を高めるものと期待する。今後、その教授法について広く発信していくことが望まれる。

### 基準項目3-3 教員・職員

- 1 教育研究上の目的及び教育課程に即した教員の確保と配置
- 2 非常勤教員との連携
- 3 教職協働
- 4 教職員の職能開発

【評価】

基準項目3-3を満たしている。

〈理由〉

学科の教員配置は、教育研究上の目的および教育課程の主領域である、小説、編集者・ライター、戯曲・脚本に即した配置となっているほか、実務家と研究者を揃え、学科のコアとなる授業科目を中心に指導する体制となっている。さらに、客員教授には専門領域における顕著な業績・実績があるだけでなく、正課外の学習支援においても重要な役割を期待できる教員を採用し、非常勤講師についてもカリキュラム・マップに基づき、専任教員の専門領域を補完するための講師を採用することで、学生に対し幅広い学びの機会を提供している。

非常勤教員との連携については、講師会を通じて教育理念や運営方針の共有を図るだけでなく、専任教員が非常勤講師をサポートするための担当制度を採ることで、カリキュラム・マップに即したシラバスの作成から、厳正な成績評価まで、一貫した教育の質保証に努めている。

学科運営においては、学生募集やキャリア支援、卒業制作展運営に至るまで、担当教員と学科担当職員、(助手)それぞれの役割が明確に定められており、学科長を中心とした教職協働の組織運営体制が構築されている。

教職員の職能開発 (FD・SD) については、学科独自の研修に加え、全学的な研修にも積極的に参画し、教育改善に反映している。非常勤講師に対しては、研修内容の録画配信等を行い、理解促進に向けた配慮がなされている。これらの取り組みは、教育文化の共有と改善意識の醸成に寄与している。

## 基準4.学修成果

### 基準項目4-1 在学中～卒業時

- 1 カリキュラムの各段階に応じた学修到達度
- 2 「卒業研究・制作」の成果
- 3 「人材の養成に関する目的」に対する達成状況
- 4 学生満足度（進路満足度・総合満足度・推奨意向）

#### 【評価】

基準項目4-1を満たしている。

#### 〈理由〉

学科の教育課程は、基礎から応用まで段階的に構築され、各年次においてポートフォリオを作成させることで学修成果を把握する仕組みが整備されている。ポートフォリオの作成を通じて、学生が自らの作品を批評的に点検し、1年間で何を学んだかを統合的に理解させている点は評価できる。

「卒業研究・制作」は、学生が作品を完成させるだけでなく、ブラッシュアップを経て、全作品が掲載される作品集「Littera（リッテラ）」や、個別の文庫本として発行されている。作品集や文庫本の制作にあたっては、他学科との協働による装丁やデザインを行い、2日間にわたる公開講評会の開催とあわせて、4年間の学修成果を社会に公表する取り組みとして機能しており、芸術大学としての特色を反映したものといえる。卒業制作として提出された作品が、のちに加筆修正のうえ、出版社から単行本として刊行されるなど、十分な学修成果を得ていると評価できる。

進路決定率は、年度によってばらつきはあるものの、2024年度は100%を達成している。学科が掲げる、作家や編集者といった「文芸直結型」の進路決定率は、3年連続目標値の10%を達成している点は高く評価できる。2025年度も編集職に4名が内定するなど、学科の学修成果と進路結果が結びついているといえる。一方、学生の満足度や推奨意向の低下については要因分析が求められる。

#### 〈参考意見〉

- カリキュラムの各段階に応じた学修到達度を図る仕組みは整備されているが、実際に期待通りの学修成果が得られたかどうかについての言及があると良い。
- 卒業時アンケートにおける学生満足度（教育・総合・推奨意向）については年度によってばらつきが見られ、特に2024年度卒業生の総合満足度や推奨意向が大きく低下したことは課題である。教育内容やキャリア支援は丁寧に行われているが、学びを通じた日常で学生が感じていることを丁寧に検証することが今後の課題かと思われる。自由記述や個別事案の検証を通じて学生の状況を丁寧に検証することが求められる。

### 基準項目4-2 卒業後

- 1 卒業後の活躍（社会の変革を牽引する人材）
- 2 社会からの評価

**【評価】**

基準項目4-2を満たしている。

**〈理由〉**

卒業生は、小説家、編集者、ライターといった文芸直結型職種をはじめ、マスコミやクリエイティブ領域など幅広い分野で活躍している。近年、卒業生の刊行図書や雑誌も増え、文学賞受賞者や芥川賞候補者を輩出していることは、学科の教育成果が社会で評価を得ている証左であるといえる。

**〈参考意見〉**

- 卒業生が「ことばの力」を磨く過程で培った思考力や想像力は、社会で必要とされるコミュニケーション力にも直結している。その点を学生自身が自覚できるよう導くことが、今後の課題であり可能性であるだろう。「聞く・話す」を重視する新カリキュラムは、その意識をさらに深めていく好例になると期待する。

## 基準5.内部質保証

### 基準項目5-1 内部質保証の機能性

- 1 学修成果の把握・分析、結果の活用
- 2 学生の意見・要望の把握・分析、結果の活用
- 3 内部質保証のためのPDCAサイクルの機能性

#### 【評価】

基準項目5-1を満たしている。

#### 〈理由〉

学修成果の把握・評価においては、ディプロマ・ポリシーに紐づいた到達目標の達成度を「進級研究・制作」や「卒業研究・制作」等の基幹科目を通じて点検し、客観的データと作品の質の評価の両面から学生の成長を把握している。またGPAを定期的に確認し、月2回の学科会議を通じて学生の学習状況を学科教職員で共有し、学生一人ひとりの特性に即したきめ細やかな個別支援へと直結させている。

学生からの意見については、学科会議で丁寧に共有を行い、教育内容・方法の改善に活用されている。とくに「授業改善アンケート結果に基づく組織的改善活動」においては、全教員が執筆する「リフレクション・ノート」を軸とした改善活動のほか、学科会議において各教員が工夫や課題についてプレゼンすることで、相互の授業内容や教授法を知るだけでなく、授業の連関を意識した改善を可能とする仕組みとして機能しているさらには、非常勤教員にも共有され、学科全体の教育内容や方法の改善・向上に活かされている。

学科の教育研究活動は、学部方針に基づき、学会会議を通じて十分に点検・評価がなされ、その結果が学科および各教員の教育研究活動の改善・向上に反映されている。さらには、非常勤教員への共有も十分に行われており、内部質保証の仕組みが適切に機能しているといえる。